

---

# スカイ学園

瑚織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スカイ学園

### 【Nコード】

N5837F

### 【作者名】

瑚織

### 【あらすじ】

私たちは、いろんなものを抱えて、ここにやってきた。そこは、誰でも受け入れてくれる、大空のような学園。

## 第一章

### 登場人物紹介

・天川 葵    a m a k a w a    a o i

この物語の主人公の女の子。中学2年生。優しい性格。

いじめではないが、精神的に追い詰められて、学校に行けなくなり、フリースクールのスカイ学園へと入学する。

温かい家庭に育ち、家族の温かさを知っている。  
生きることに疲れている。

人との関わりあいには嫌いではないが、人見知りが激しく、輪に入っ  
ていけない。

・雫草 美雨    s i z u k u s a    m i u

クールで孤独な女の子。中学2年生。

いじめを受けて、不登校になる。

家庭にも、学校にも居場所を失いスカイ学園に保護される。  
たくさん傷を負っている。

・空野 優樹    s o r a n o    y u u k i

大金持ちの優しい性格の若い男性。年齢不詳。

スカイ学園の学園長。

傷ついた子供を癒すため、カウンセラーの資格を持っている。

彼自身もいじめ自殺で友達を亡くしている。

・川嶋 きらら kawasima kirara

心臓病で入院している女の子。中学2年生。  
生きることを諦め、明日への希望も失っている。  
女優になるという夢があったが、それも諦める。  
自殺も考えている。

・小田切 麻 odagiri asa  
中学3年生。

看護婦になるという夢を持っている。  
しかし有名中学に落ち、絶望する。  
更に、厳しい両親の教育に我慢できず、家を飛び出した。

・小波 静香 konami sizuka  
中学3年生。

弁護士になる夢に向かって日々懸命に努力している。  
しかし、家が貧しく大学にも行けず、学校も通えなくなる。  
なので、望んでも高校に行けず、働いていたが体を壊し、鬱気味に  
なる。  
そこを学園長に助けられる。

・彩原 明美 ayahara akemi  
中学3年生。母親が居ない。

前の学校でクラスから浮き、父親の入院費を稼ぐために夜の仕事を  
している。  
しかし、その父親も亡くなり深く傷ついているところを学園長に救  
われた。  
将来なんて考えていない。

## 第一章 新しい出会い

ああ、空が青いなあ。

葵は手を空へと伸ばした。

このまま、吸い込まれてしまえばいいのに。

なんで私は、ここにいて。

なんでここに、私は居るんだろう。

「ふう……」

葵は、重く、長くため息を吐いた。

「ここだ……」

透き通るほどに白い壁。

今日の空にびったりすぎるほど。

茶色のドアの前で立ち止まる。

また、学校か……

結局またあの繰り返しなのかな……？

しかし、家族をこれ以上傷つけないためにも、入らないわけにはいかない。

葵は、覚悟を決め、ドアを開けた。

「あの……今日から入る天川です！」

そう言いながら、中を見渡す。

中は薄い黄緑色の、どこかホツとする感じの壁だった。

すると、前から歩いてくる人影があった。

「やあ、来てくれたんだね。ありがとう。」

葵は少し驚き、その人影を見た。

「あ、初めまして。天川葵あまかわあおいです。」

とりあえず挨拶をした。

「こちらこそ初めまして。僕はこの学園の学園長の空野優樹そらのゆうきです。どうぞよろしく。」

「いいえ、こちらこそ。」

「じゃあ、天川さん、教室へ案内するよ。僕についてきて。」

「はい。」

葵は、学園長の後ろをついていった。

優しいような学園長に少し不安は和らいだものの、まだ不安だらけだ。

「ここが、天川さんの教室だよ。」

葵はそう言われ、じつくりと教室の外見をしてみる。

吸い込まれそうで安らぐ青色。

1つしかない教室。

「あ、はい。」

「じゃあ、みんな待つてるよ。入ろう。」

その学園長の言葉に葵は、少し心が重くなった。

ガラッ

「みんな、待たせたね！ 新しい生徒を紹介するよ！」

葵は、学園長につられながら、ゆっくりとゆっくりと歩いていった。

そして、思い切って前を見てみる。

女子だけの少ない生徒数。

更に細かく見渡した。

気の強そうで明るそうな、ショートヘアの子。

大人しそうなみつまみの子。

少し大人っぽくてセクシーなストレートヘアの子。

そんな個性溢れた面々だ。

「天川さん、自己紹介をしてくれるかな？」

「あつ、はいっ！ えっと……天川葵と言います。よろしく……お願いします。」

緊張のせいか、ドギマギしてしまう。

「じゃあ、天川さんの席はここだよ。」

「はい。」

葵はそう軽く返事をして、席に着いた。

すると、近くの気の強そうな子が話しかけてきた。

「あたし、小田切麻。おたぎりあまよろしくね。」

「う、うんっよろしく!」

「あ…あのっ…私…小波静香こなみしずかと言います。よろしくお願いします。」

「うんっ。よろしくね」

「私は、彩原明美。あやはらあけみよろしく。」

「よ、よろしくっ!」

こうして、葵は、とりあえず自己紹介を済ませた。

「じゃあ、自己紹介も済んだことだし、自由時間にしようか。」

「えっ…!??」

そんな驚いている葵に構わず、麻たちは元気よく返事をした。

「はいはっいっ!」

そして、学園長が出て行った。

わけも分からず呆然としている葵に、麻が説明してくれた。



「ここは、自由な学校だから、授業とかないんだ。好きなことをすればいいの。あ、そうだっ！ この学園を案内してあげるよ！」

「好きな…こと…」

そう考えて、葵は黙り込んだ。

自分には、好きなものなどないのだと、気づいてしまったから。

「…天川さん？ ほら、行く？」

「え、う、うん！」

この学園でこそ、うまくやらなくちゃいけない。

その決意が重く葵にのしかかり、笑顔を必死に作った。

麻につれられるまま、教室を出た葵は、麻の話に必死に相槌をうつていた。

「ねえ、天川さん、無理してない？」

そんな時、突然話を中断して、麻が顔を覗き込んだ。

「え…、いや、そんなこと…」

また笑顔を作ろうとしたけど、あまり上手くできなかった。

「ほら、また無理して笑う！ 見学嫌だった？ 遠慮することないんだよ？」

葵の心には、何かが刺さったようだった。

心配してくれている麻の気持ち、分かるのに。

それでも心を開けない自分自身がなによりも嫌だ。

「ちっ、違っっ！ 嫌なんかじゃない…」

「だったら、どうしてそんなに必死で無理して笑ってるの？ 遠慮なんかいららない、ここはそういう場所なんだよ！？」

必死に訴えかけてくれる麻に、葵は目を逸らせなくなった。

「ご、めん…。私、なんかよく分かんなくて…、ずっと、そういう風にしてきたから…」

「そっか…。あたしこそごめん。でも、ここはすっごくいい場所だよ！ あたしが保障する。」

そう言っただけで笑った麻に、葵もつられて笑ってしまった。麻には、人を幸せにする何かがある…。葵はそう、感じていた。

## 第二章

### 第二章 生きること

葵がスカイ学園に入学して、しばらくが経った。  
なんだかだいぶ慣れてきたと思う。

「そだ、葵！ 今日、きららの所に行こうか？」  
「きらら？」

麻が言い出したことに、葵は聞き返した。

「あ、紹介まだだったっけ。川嶋きらら。着いたら紹介するよ！」  
麻が向かった先は、病院だった。  
入った瞬間にする、病院独特の臭いが、葵は少し苦手だった。

『201号室』

と書かれた所に、麻は迷わず入っていった。

「こんにちは、きらら、いる？」  
「あ…、麻…ちゃん…」

そこにいたのは、色白でほっそりとした女の子だった。

「今日は、きららにスカイ学園の新しい友達を紹介しようと思って。  
この子、友達の天川葵。」

「よ、よろしく。」

とりあえず、葵はぺこりと小さく会釈した。

「…よろしく」

ふんわりと、きららは優しく微笑んだ。  
すぐにきららと葵は打ち解け、話に花を咲かせた。

それが落ち着いた頃、しんみりした口調で、きららが話し始めた。  
「私ね…、心臓病、なの。直らないって言われてて、ずっと生きることも、明日への希望も、諦めてた。でも、スカイ学園に入学して…、そう思わなくなったの。学園長が、みんなが、生きることの楽しさ、教えてくれたから。」

「心臓…病…！？」

葵は驚きを隠せなかった。  
少し痩せてはいるものの、そんなに重い病気を抱えているとは思っていなかったのだ。

「だから、羨ましいんだ。葵ちゃんや麻ちゃんみたいに、元気で笑っている人たちが…ごめんね、こんなこと話しても、何にも解決しないの分かってるんだけど…」

きららのその言葉が、葵の胸にグサツと突き刺さった。  
自分は、病気でもないのに生きるのに疲れたとか言っ…。  
こんなに戦っている子がいるのに、と自分を叱責した。

その後、すぐに麻と葵はきららと別れた。

「ばいばい。また来るね！」

「うん、待ってるよ。さよなら。」

葵にとって、とても充実した時間だった。

### 第三章

#### 第三章 麻の傷

近頃、麻の様子がおかしい。

葵は、それをすごく感じていた。

「麻ちゃん…、なんかあった？」

「な、なんもないよ！ あたしは元気元気！」

明らかに無理に麻は笑顔を作っていた。

しばらく葵は様子を見ているだけだったものの、日に日に目に見えてやつれていく麻を見ていられず、葵はある日、麻を中庭へと連れ出した。

「……………」

麻は、もう笑顔を作るのも忘れて何も話さない。

「…………、麻ちゃん、本当最近おかしいよ？ 何かあったの…？」

麻が心配で心配でたまらなかった。

「葵…………、には、話すよ…。」

いつものキラキラとした目と、笑顔を失った顔で麻は話し始めた。

「…………あたし、家出たんだ。」

始まりの言葉に葵は言葉を失った。

「家…出！？」

そして、また麻は話し始めた。

「あたしね、看護婦になるって夢があるの。ずっと小さい頃からの、

大きな夢。いくつ年を重ねても、その思いは揺らぐことはなかった。だから、あたし頑張ったよ。少しでもいい中学に入りたくて、毎日必死で寝る間も惜しんで勉強した。でも、絶対受かりたかった中学に、あたしは…落ちた。先生にだって、确实だって…言われてた。なのに、本番になると、緊張しちゃって…この日のために、なにもかもこの日のために頑張ってきたのに、あたしは…落ちた…！」

麻の目から、ポタポタと大粒の涙が零れ落ちる。

希望を映さない、悲しい目。

もう、葵に話すというより、自分の行き場のない想いをぶつけているだけだった。

「それから、市立の中学行くことになったけど、どうしても足が向かなかった。両親には、絶対行け。そればかり言われてた。でも、あたしはそんな両親を無視して、このスカイ学園に入学した。もちろん、両親との仲は最悪になった。だけど、あたしはスカイ学園が大好きだったから、自由になれた。高校は、良い所行くなって決めた。でもさ、いい加減疲れちゃったよ。あんな両親。私の気持ちも知らないで、無神経に普通の学校に通えつてばかり言っつてさ、何にも分かってないんだ。最低な親。だから…あたしは家を出た。」

すべてを話し終えた後、麻は長い長い溜め息をついた。

「…、葵…！？」

麻が目を見開いて驚いていた。

それもそのはず、葵の頬には、いつしか一筋の涙が伝っていた。

「あれ、私…泣いてる…？」

麻は、なんだか吹っ切れたようなすつきりした笑顔で葵を励ました。「ごめん！あたし、もう大丈夫！これから頑張るよ！葵、ありがとう。」

「麻…ちゃん…、よかった…」

二人の絆がとても強まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5837f/>

---

スカイ学園

2010年10月17日09時01分発行